
平均的な学生三人の他愛のない会話

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平均的な学生三人の他愛のない会話

【コード】

N0861N

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

高校生男女三人の何でもないワンシーン。

「あのさ」

柵にもたれかかりながら、天を仰ぐ。

十月の空はオゾン層が透けて見えるほど晴れていて、夏の暑さを思い出させる真っ白な太陽が空のど真ん中で輝いていた。

「何だよ」

「よく漫画やテレビとかで、生徒が屋上に出てるシーンあるじゃん」

「あるな」

「あれって非現実的だよな」

「まあな」

「思春期のさ、神経が過敏な少年少女をさ、屋上に自由に出入りさせるなんて、学校が自殺を推奨しているとしたか思えないよな」

「ああ、漫画とかで自殺が多いのって、そういう理由なのかな」

「かもな」

ずずびっと、裕也はブリックパックのコーヒーを啜った。

「でも屋上に入入りできるっていう意味では、うちの学校も変わんなくね？」

「ここは屋上と呼んでいいのか？」

うちの学校は三つの教室棟から成り、それぞれを渡り廊下棟で繋いでいる。

教室棟は三階建て。渡り廊下棟は二階建て。

すなわち、教室棟の三階から、渡り廊下棟の屋上へと出ることができる。

今、裕也と自分はそこにいる。

「本来は屋上だろ？ 誰も屋上って呼ばないけど」

「だってここ、屋上って感じしないもん」

「何で？」

「何でって……何でだろ？ でも少なくとも、ここから飛び降りた

いとは思わないだろ？」

「ああ、確かに。ていうか二階から飛び降りても、即死はしないんじゃないか？」

「うわ、やだな、それ。死ぬなら一瞬で死にたいよな」

「そうだな。痛いのは勘弁だな」

「何の話してるの？」

いつの間にか隣にいたのは、クラスメイトの大関梓。

肩口まで伸ばした黒髪に、太陽の光が反射して、俺は目を細める。冬服になった制服の紺色が、白い屋上の床に映えた。

「死ぬときは痛くないのがいいよな、って話」

べこつと、ブリックパックを凹まして、裕也が答える。

「そうねえ、私も痛いのは嫌だなあ」

俺の隣で、俺と同じように柵を背中にして、寄りかかる。俺は肩と腕を柵に乗せていたが、梓は背が低いので頭を乗せている感じだった。

「阿由葉君、死ぬの？」

ぶはっ、と俺は嘔き出した。

「いやいや、ちょっと待て。何を言い出すんだ、お前は」

「だって死ぬときの話をしてるから」

「短絡的過ぎるだろ。死ぬ話してる奴は死ぬのかよ」

「うーん、一概には言えないけど、生きようとしている人は死ぬ話なんてしないんじゃない？」

「そうかあ？」

何か納得がいかない。

「そうだな、いい機会だから、阿由葉、ここから飛び降りてみれば？」

「え、裕也お前、いきなり何言ってるの」

「いや、ほら、阿由葉って運いいじゃん。お前ならここから落ちても平気かなあ、って思って」

「お前、人の命なんだと思ってんだ」

くすくすと小動物のように梓は笑った。

「やってみれば？ 阿由葉君」

「は？」

信じられないものを見るような顔で、梓を見た。

「ほら、大関もそう言ってるし」

「私も阿由葉君なら大丈夫だと思うよ？」

「え、いや、ちょっと、待って、何この流れ」

「ほら、怖くないから。誰でも初めては緊張するものだから
ぐいぐいと裕也が押す。」

「初めてってお前、二度目はあるのかよ」

「さあ？ それはお前次第じゃね？」

「阿由葉君なら三回くらいいいけるんじゃない？」

「いや、俺は四回はいけると思うよ」

「じゃあ私は五回」

「俺は六回」

「七回」

「馬鹿かお前ら」

少し本気の声を出してみた。

裕也はおどけたように肩を持ち上げる。

「マジになんなよ、阿由葉。軽いジョークじゃないか、アメリカン
ジョーク」

「そうそう、アネクドート、アネクドート」

「アネクドートは違う」

「はあ、と大げさに溜息を吐く。」

「ノリで人を殺そうとするなよな」

「まったくだな。人の命を軽く見るなんて、現代教育の弊害だな」

「そうね。ゆとり教育って怖い」

「お前ら、変な誤魔化し方するな」

「ていうか、何の話してたっけ、俺ら？」

「さあ？ 何でもいいんじゃない？」

あつけらかんと梓は言う。

「それもそうか。どうせ大した話題じゃないしな」

「そうだね、大したことじゃない」

「ああ、大したことじゃない」

俺たちは揃って、渡り廊下棟の屋上から見える景色を眺めた。

丘の上にある学校からは、片田舎の町並みがよく見渡せる。高層ビルなんてない。背の低い民家が寄り添うように密集している。遙か遠方には、紫色をした山。

「ねえ」

「……………」

「……………」

「ねえってば」

「どっちに話しかけてるんだよ。俺？ それとも裕也？」

「うーん、じゃあ阿由葉君で」

「じゃあつてなあ、梓」

「いいよいよよ、どうせ俺は仲間外れですから、お二人でよろしくやってください」

「ほら、馬鹿がすねた」

「ごめーん、裕也」

「よくある話です。男女の三角関係。泣きを見るのはいつだって二人目の男」

「うぜえ。で、何だよ、梓」

「あ、うん。今日出された数学の課題、教えてもらいたいな、って思ってる」

「二時間目の？」

「そう。問五までやって来いって奴」

「俺もまだやってないぞ」

「でも、阿由葉君なら解けるでしょう？」

「ん、まあ、しばらく考えれば分かるかも」

「だから学校終わったら図書館行って、一緒にやる？ ほら、裕也」

も

「いいんですかあ？ 邪魔者になりませえん？」

思い切り卑屈な顔をする裕也。

「お前、それは本当にうざいぞ。ていうかキモイ」

「裕也も一緒にやった方がはかどるよ、きつと」

「ああ、大関は優しいな。人の温もりを知った船越裕也、十七の秋

」

もう突っ込むにも疲れたので、とりあえず二の腕を殴っておいた。

キーンコーンカーンコーン

チャイムの音。

校内の空気が一転する。昼休みの解放された時間から、また、あの拘束された時間へと。

「次、何だっけ？」

俺たちは肩を並べて教室へと向かう。

「古典」

「あ、やべ、俺今日指される日だ」

裕也が頭を抱えた。

「そついえば宿題あったね」

「大関、やってある？」

「あるよ」

「見して」

「もう時間ないよ」

「訳のところだけソッコーで写すから」

「分かった」

「やつべえ、マジで焦ってきた」

裕也は廊下を走り出した。

「おい、お前らも急いでくれよ、特に大関！」

大声で叫ぶので、廊下にいる生徒たちの注目を浴びた。

俺は結構恥ずかしかったのだが、大関は楽しそうに笑っていた。

「裕也君って面白いよね」

「馬鹿は強いって見本だな」

「……ねえ」

「うん？」

梓が丸い瞳で、見上げてきた。

「阿由葉君ってさ」

「おおーい、マジで急いでくれって!」

梓の言葉を裕也の声が遮る。

「うるせーっ! 騒ぐ暇があつたら自分で訳してる!」

裕也が五月蠅いので、つい自分も大声で返してしまった。

「あ、悪い、梓。何だって?」

「……ううん、何でもない」

そう言つて首を横に振つた梓の、どこか寂しげな瞳を、そのとき俺はこの上なくいとおしいと思つた。しかしそれは、親が子供に抱く感情と同じもので、思春期の男女が共有する青臭い感情ではなかつた。

「そういえば、知ってるか?」

「何を?」

「図書館の裏に、新しくパン屋できたの」

「え、知らない。いつから?」

「先週の土曜。日曜に行つてみたけど、結構うまかつた」

「ねえ、そこに」

「売ってたよ。クロワッサン」

「!」

髪の毛がふわっと持ち上がる。

「行こう! 学校終わつたら、絶対!」

「あくまで課題のついでだぞ?」

「分かつてる!」

梓も走り出した。走つたからと言って、授業が早く終わるわけで

もないのに。

「おう、大関、ナイスダツシュ！」

「ほら、阿由葉君も早く！」

「はいはい」

廊下を走るのには少し抵抗があったが、まあ、二人も前科者がいて、今更気後れする必要もあるまい。

俺は小走りで二人の背中を追い駆けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0861n/>

平均的な学生三人の他愛のない会話

2010年10月8日10時39分発行